

2023年3月18日

博士学位論文審査要旨

申請者： 折原佑実（おりはら ゆみ）

2020年3月 早稲田大学大学院教育学研究科博士後期課程退学
現在 同研究科研究生 作新学院高等学校非常勤講師

論文題目：『古事記』の構想 一神代から皇代へ一

審査員：

主任審査員	松本直樹 <small>まつもと なおき</small>	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士（文学）早稲田大学
審査員	福家俊幸 <small>ふくや しゆき</small>	早稲田大学教育・総合科学学術院教授	博士（文学）早稲田大学
審査員	高松寿夫 <small>たかまつ ひさお</small>	早稲田大学文学学術院教授	博士（文学）早稲田大学
審査員	工藤 浩 <small>くどう ひろし</small>	日本工業大学教授	博士（文学）早稲田大学

1 本論文の目的と方法

本論文は、和銅5年（712年）に成立した『古事記』について、その形成過程を踏まえながら、一つの作品としての構想と構成を明らかにすることを試みたものである。

『古事記』は、大和王権国家の由来と正当性を説くことを目的に、天地創生から第33代推古天皇時代に至るまでの国家の〈歴史〉を記した作品である。上・中・下の3巻から成り、上巻が天地創生から初代神武天皇となるカムヤマトイハレビコの誕生までを記す「神代」（所謂「建国神話」）、中・下巻が神武天皇から推古天皇の時代までの事跡を記す「皇代」であり、基本的には時間軸に沿って、淀みなく一本の〈歴史〉文脈が展開している。

『古事記』は、その序文に、

（天武）天皇詔之朕聞諸家之所齋帝紀及本辞既違正實多加虚偽當今之時不改其失未經幾年其旨欲滅…故惟撰録帝紀討覈旧辞削偽定實欲流後葉

とあるように、「帝紀」と「本辞＝旧辞」（以下「旧辞」とする）という、それぞれが多数の異伝を持つ二種類の資料に基づき、天武の判断基準に従って編纂されたものであることが知られている。現在、「帝紀」は皇室の系譜などの記録、「旧辞」は神話伝説や歌謡などを含

む物語性をもった歴史叙述に当たるとするのが定説である。以上のような成立事情は、養老4年(720年)に成った『日本書紀』もほぼ同様である。『日本書紀』には、とくに「神代」において、本文とともに複数の異伝が列記されていて、「旧辞」に当たる資料に幾つかの系統に分類できる複数の伝承があったことが明らかになっており、また神武以降の「皇代」に関しても『古事記』とは異なる系譜を記す箇所があるなど「帝紀」にも異伝があったことが分かっている。

本論文は、「帝紀」「旧辞」という性格の異なる二種の資料の、それぞれ複数の伝承が存在していた状況において、『古事記』がいかなる構想を持って〈歴史〉を一本化し、一つの作品となるに至ったかについて、『日本書紀』諸伝との丁寧な比較と、用語の選択というレベルの表現の分析を通して明らかにしようと試みたものである。

2 本論文の構成

本論文は、全2部全8章の論考に、序章と終章を加えた形で、以下のような構成をとっている。

序章 『古事記』の構成と表現

第一部 神話の諸相と神代の構想

第一章 降臨神の交替—記紀天孫降臨神話の諸相—

第二章 ウケヒ・天石屋戸段と天孫降臨段

第三章 高天原における意思決定と「八百万神」「諸神」

第四章 「令占合麻迦那波而」にみる『古事記』天石屋戸段の構想

第二部 天皇の系譜と皇代の構想

第一章 「天津日高日子穗穗手見命」にみる「天神の御子」の変容

第二章 『古事記』『日本書紀』の綏靖・安寧・懿徳天皇后の異同をめぐって

第三章 開化記日子坐王系譜の構造と性格

第四章 応神記ヒボコ系譜と『古事記』の時間

終章 神代から皇代へ

3 本論文の概要

各部・各章の概要は以下の通りである。

序章 『古事記』の構成と表現

本論文の目的、方法、構成等を記した章である。『古事記』と『日本書紀』とを比較すると、記事の有無や順序、登場する神や人の名前など大小さまざまな差異が認められる。

第一部「神話の諸相と神代の構想」では「神代」を扱う。「神代」では、『日本書紀』が各章段ごとに本文と複数の異伝を列挙し、時として章段間の接続が曖昧になっているのに対して、『古事記』は基本的に〈歴史〉(建国神話)を一本化して、一つの文脈を通そうとする意図を持って編まれたことが明瞭である。複数の伝承を繋いで一本化するに当たって、用字・用語の選択が重要な役割を担っていることを『日本書紀』諸伝との比較を通して明かにする。第二部「天皇の系譜と皇代の構想」では「皇代」を扱う。「皇代」の記述に関しても、両書間には記事の有無や順序、さらに天皇に連なる系譜などに少なからず相違が認められる。『古事記』が一本の〈歴史〉を通すに当たって、系譜と歴史的叙述を如何に有機的に繋いでいるかを『日本書紀』との比較を通して検証していく。

第一部 神話の諸相と神代の構想

第一章 降臨神の交替—記紀天孫降臨神話の諸相—

『古事記』『日本書紀』における天孫降臨条諸伝の比較を通して、天孫降臨神話のヴァリエーションの諸相を確認し、その上で『古事記』の構想と表現上での工夫を指摘する。天孫降臨神話においては、降臨神の交替の有無と、司令神の違いとが相関しており、降臨神の交替を語る型の伝承では、アマテラスを司令の中心となっていることが確認できる。『古事記』は、この型の伝承を採用しつつ、別系統の司令神タカミムスヒをも併せて登場させながら、アマテラスをより上位に置くための工夫を施している。また、アマテラス・タカミムスヒの両神の血統を継ぐのが降臨神ホノニギであるが、それより一代前の降臨候補者であったオシホミミを敢えて「太子」と呼ぶことで、アマテラスの皇統であることが太子(皇位継承者に相当する皇子の呼称)の必要条件であることを示し、そこに外戚としてのタカミムスヒの血統を入れようとする『古事記』の意図を析出することができる。

第二章 ウケヒ・天石屋戸段と天孫降臨段

建国神話を一本化し、一つの時間軸の上に〈歴史〉を展開させている『古事記』において、「太子」であるオシホミミの誕生を説くウケヒ神話、アマテラスの絶対性を確認するイハヤト神、天孫降臨神話が緊密な関係をもってその主題を支えていることに疑いはない。

『古事記』『日本書紀』の諸伝を構成要素の違いや多寡によって比較検討する時、タカミムスヒを皇祖とする伝承の本来性を確認することができるが、かような事情の上にならば『古事記』がアマテラスを強く「皇祖」として印象付けようとした工夫として、イハヤト神話の表現やウケヒ神話における物実交換型伝承の採用などを指摘する。

第三章 高天原における意思決定と「八百万神」「諸神」

『古事記』イハヤト神話では、隠れたアマテラスを導き出すために、高天原の「八百万神」

が集会し、思金神の思慮や「占い」の結果を用いて、神々を使役して作戦を展開していく。このような「八百万神」を主体とするイハヤト神話は『日本書紀』諸伝には見られない『古事記』独自のものである。『古事記』においては後の天孫降臨条にも「諸神」と名を変えた八百万神が登場し、タカミムスヒとアマテラスはこの八百万神と思金神の意見に基づき葦原中国へ国譲りのための使者を派遣する。この派遣は二度にわたって失敗に終わりのだが、それにも関わらず司令神は再三に亘って諸神と思金神に意見を求めている。次章において詳述するように、イハヤト条においては、重要な意思決定が「占い」と思金神の思慮に基づいてなされるが、天孫降臨条においては、八百万神と思金神の意志判断が重要視されていることを読み取る。

第四章 「令占合麻迦那波而」にみる『古事記』天石屋戸段の構想

『古事記』の国生み条やイハヤト条においては、登場する神々の意思を超えた絶対的な神意として「占い」が機能している。国生み条においては、最初に国生みを失敗したイザナキ・イザナミから報告を受けた「天神」が「占い」を通じて再度の詔を出し、イハヤト条においては八百万神が「占い」を通して神々を使役して、高天原での祭式を実行している。イハヤト条の意図について考えると、マテラス不在の天石屋戸段において、高天原が内部で問題を解決する能力をもたないことを示しており、ひいてはアマテラスの絶対的な必要性が逆説的に強調されていると言える。

第二部 系譜と皇代の構想

第一章 「天津日高日子穗穗手見命」にみる「天神の御子」の変容

本章では、第一部で扱った『古事記』上巻「神代」から、中下巻の「皇代」とを連続させる『古事記』の手法を中心に論じている。山幸彦であるホヲリ（火遠理命）は天孫降臨した皇祖ホノニギと山神の娘コノハナノサクヤビメとの間の第三子として誕生するが、ホヲリは「天津日高日子穗穗手見命」という別名の他、「虚空津日高」という他に見えない独自の呼称を併せ持っている。前者は、同神が唯一無二の「穂」（穀霊）の継承者であることを視覚的に示すための神名表記であり、後者は、穀霊でありながら、高天原に起源する「天つ日子」から地上世界の王への過渡的な存在であることを示すための呼称であり、ともに『古事記』の表現上における工夫である。また、ホヲリはアマテラスからウガヤフキアヘズに至る五代の皇祖神のうち、『古事記』において初めて宮の所在、御陵の所在が記されるのもホヲリである。さらに、宝算・御陵記事は、中巻以降の各天皇段に共通する記事であるが、上巻末にホホデミの宝算・御陵記事が存在することは、続くウガヤフキアヘズとタマヨリビメとの婚姻、生まれた御子たちについての記事が皇代における各天皇記の皇妃皇子女条の記載形式を採っていることと合わせて、地上に降った「天神の御子」が「天皇」に近づきつつあることを示している。上巻神話の世界に起源し、上巻神話に保証されながらも、新たな天皇の時代が幕を開け、中巻以降の「皇統譜」が展開することを示そうという『古事記』の構

想を見て取ることができる。

第二章 『古事記』『日本書紀』の綏靖・安寧・懿徳天皇の異同をめぐって

『古事記』において、初代神武天皇は「神の女」を娶る最初で最後の天皇である。このことは、神武がカムヤマトイハレビコと呼ばれ、上巻の「神代」に生まれた最後の「天神御子」でありつつ、同時に初代「天皇」であることとを意味づけるものである。かつて「天神の御子」と呼ばれた神武天皇が、「神御子」であるイスケヨリヒメを后として誕生したのが綏靖天皇であり、その瞬間に、アマテラスを起源とする「天神御子」の系譜は「天皇」の系譜に更新される。上巻「神代」の建国神話から中巻以降の「皇代」へ、〈歴史〉の流れ、皇統譜は継承されながら、いっぽうで独立した地上世界の王としての新時代への幕開けを告げる『古事記』の表現と系譜の在り方を、『日本書紀』系譜との決定的な相違をも踏まえながら指摘する。

第三章 開化記日子坐王系譜の構造と性格

『古事記』開化天皇の皇妃皇子女条には、開化の皇子である日子坐王の数代に亙る長大な後胤系譜が記されている。当該系譜は、四人の后との婚姻に始まる4系統の系譜で構成されるが、それぞれの系譜末代に垂仁記、仲哀記などに後の〈歴史〉に登場する人物名がみえ、それらの人物の出自を示す系譜として機能していることを覗うことができる。中巻の後続する様々な記事との関わりから、複数の目的を達成するために統合され、肥大化した系譜であり、ほぼ中巻全体に及ぶ内容のインデックスとしての機能をも持ち合わせた感がある。系譜はいわゆる帝紀に属し、歴史的叙述（旧辞）と資料段階において必ずしも一体でなかったと考えられているが、それら二種の資料を巧みに組み合わせながら、一つの〈歴史〉を記した『古事記』の手法を認めることが出来る。

第四章 応神記ヒボコ系譜と『古事記』の時間

『古事記』中巻の末部に当たる応神天皇条の最後部に、新羅の国王の子であるアメノヒボコの日本への渡来、アメノヒボコの系譜、アメノヒボコが将来した神宝、神宝由来の女神であるイズシヲトメをめぐる兄弟争いという一連の物語が存在する。系譜において、アメノヒボコがかつて新羅を征討したと伝えられた神功皇后（仲哀記）と系譜上結び付けられていることなどから、仲哀から応神条にかけての主題の一つである「征韓」の正当性を保証する性格をもつことが従来から指摘されてきた。

また、上述のアメノヒボコの渡来に関する一連の関連記事が、応神記にありながらも時間の流れから外れた「昔」の事件として記載され、神宝由来の女神イズシヲトメの神話的な記事が付属していることも、『古事記』において極めて特徴的である。アメノヒボコは、新羅王子であり、オキナガタラシヒメの祖先として系譜上で、ヒメの「征韓」の正当性を保証し、さらにはヒメの子孫である応神天皇における天下の統治者としての天皇の完成を保証しが

ら、自身は王権に直接的に関わることなく、「昔」におけるいわば神話的な存在として、『古事記』の時間的整合性を崩すことなく〈歴史〉を保証する存在として機能している。

『日本書紀』におけるアメノヒボコ関連記事との比較を通して、『古事記』編者による独創的な構想があったことを確かめることができる。

終章 神代から皇代へ

『古事記』『日本書紀』ともに、大和王権国家の由来と正当性を神代を含めた〈歴史〉として説明するために編纂された作品である。ただし両者の間には決定的な相違点がある。

『日本書紀』が基本的に編年体を採り、自身が定めた本文の絶対性を揺るがしかねない異伝複数の異伝（「一書」「一云」など）を記載しているのに対して、『古事記』は異伝の存在を許容せず、上巻はじめの天地創生から、下巻最後の第33代推古天皇の崩御までのすべての事件を基本的に連続した時間軸の上に配置している。

上巻の神代（建国神話）では、あくまでもアマテラスを唯一絶対の皇祖と位置づけ、その子孫であり、さらに山神や海神の血統をも統合した天神御子による地上世界の統治の正当性を述べ、中巻では、建国神話の保証を受けながら、独立した地上界の王としての新たな天皇の時代の幕を開ける。中巻では、出所の異なる系譜と歴史叙述の二つの資料を巧みに組み合わせながら、朝鮮半島をも含めた天下の統治に到る〈歴史〉を組み立て、新羅国王の血統までを統合した系譜的に完成された天下の統治者を完成させ、下巻冒頭の聖帝仁徳へと天皇系譜を繋いでいく。『古事記』が一つの構想のもとに、複数の資料を組み合わせ、表現に工夫を施しながら、神代から皇代までを一つの〈歴史〉として描いていることの一斑を見届けることができた。

4 総評

本論文における本論の8章は、それぞれが内容・量ともに独立した一編の論文としての要素を満たしながら、序章から終章に及ぶ全2部全10章が首尾一貫したテーマのもとに構成されており、博士論文として適切な分量と体裁を備えている。

『古事記』の三巻構成は、上巻が「神代」と呼ばれる建国神話、中・下巻が初代神武から第33代推古に至る歴代天皇の時代の事跡を記した「皇代」に当たり、全体が一本の時間軸に貫かれた基本的には一直線の〈歴史〉として構成されている。上巻「神代」から中下巻「皇代」へは、一つの〈歴史〉が連続しながらも、いっぽうで神の活躍する時代から、天皇を中心とした時代へ、皇祖神から天皇へと変遷を遂げている。本論文は第一部に「神代」に関する4つの章を置き、第二部の冒頭に神代から皇代への連続と二つの時代の区分に関する2つの章を配置し、以下に皇代に関する2章を置いており、『古事記』の3巻構造に則して、適切な構成を採っていると言える。

第一部「神話の諸相と神代の構想」では、『古事記』編纂時代に存在したであろう複数の系統の建国神話群を資料としながら、『古事記』が神話による〈歴史〉記述を一本化した跡を複数の異伝を列挙する『日本書紀』諸伝との丁寧な比較と、用語レベルにおける『古事記』の表現上の工夫を通して見届けている。当時、必ずしも絶対ではなかった皇祖神に関する伝承をアマテラスで一本化しながら、アマテラス以外（タカミムスヒ）を皇祖神とする伝承を無理なく巧みに取り込んでいく『古事記』の手法を析出した。

諸伝の比較、表現の分析が極めて精緻になされ、行論も丁寧であり、『古事記』の読み方として一定以上の高い説得力を有している。ただし、複数系統の建国神話の中からアマテラス系伝承を採用するに至った『古事記』の意図にまで言及されていない点において、今後さらなる考察が必要である。

第二部「天皇の系譜と皇代の構想」では、主として『古事記』中巻の神武から応神に至る皇代を扱う。出所の異なる系譜資料（帝紀）と歴史叙述（旧辞）を有機的に組み合わせながら、完成度の高い一つの歴史作品として『古事記』が出来たことを指摘する。各章とも精度が高いが、特に第4章「応神記ヒボコ系譜と『古事記』の時間」は、基本的に一本化した時間軸を有する『古事記』における例外的な部分を、一つの作品の構成上の創意として評価した点において高い独創性があり、本論文中でも珠玉の一章であった。

全体として、分析の精緻さと行論の着実性において、類まれな論文に仕上がっていると評価することができる。これまで提唱されてきた通説をそのまま受け入れるのではなく、一つ一つ独自に検証しつつ論を進める慎重さも高く評価することができる。章ごとに読みに対する新しい提言や発見があり、いずれも一定以上の説得力を有している。もちろん『古事記』の読み方を一変させる、あるいは『古事記』の新たな価値を提唱する域にまで到達してはいないが、今後も緻密な分析を積み重ねることによって、将来的に学界に一石を投じる可能性を感じさせるだけの優れた論であった。以上のことから、審査員一同は一致して、課程における博士（学術）の学位を授与するに値する論文であるとの結論に至ったので、ここに報告する。

以 上